

叫、当事者が耐えているその身ぶり全体を見ようとする時、私たちは初めて「記憶を分有する」準備を整えられたと言える。学習を創る際に言葉の内容以外の部分にも目を届かせることで、語られる言葉の内容を追う学びとは異なる次元に立てるのではないだろうか。

ユネスコでのキーワード「再想像」

ユネスコから2021年に出された報告書のタイトルには「再想像」という言葉が入った。人間同士や自然との関係性など、地球規模の危機がさまざまな局面で展開している現在を今一度捉えなおし、未来の教育をどのように創造していくかが問われている（International Commission on the Futures of Education 2021）。「記憶の分有」を可能にし、多様な身ぶりを受け止められる学習とは、この「再想像」というキーワードとも通じるものである。すなわち、人権学習においても、「再想像」への回路を豊かに、厚みをもった実践を創造していくこと、それが当事者の語りと身ぶりそのものを受け止められる学習となるからである。

実際に物にさわることー触覚、を大切にした「ユニバーサル・ミュージアム」を監修した広瀬は、「生きること」を「光」全体と述べ、視覚で捉えられる「光」はほんの一部であり、「めぐる」をキーワードに次のように述べた（広瀬 2023）。

「物にさわると、全身をかけめぐる感動が得られる。自らの身体を動かし、手を伸ばせば、他者、そして新たな自己にめぐりあうことができる。展示会場をゆっくりめぐり、思考をめぐらす。ぐるっと体と頭がひとめぐりして、また元の場所（自分）に戻ってくる。原点に立ち返ったあなたは、きっと今まで以上に『光』輝いているだろう」

見える光と見えない光、その全体を補足する想像力と洞察力を磨くために、「もっと自分の内面（物語）にさわること」を提示した。

学習を作る際には、表面的なものと内発的なものとのつながり、想像力や洞察力を働かす複数の導線と多様なめぐり方があることを勘案しておくことが重要になるだろう。そうすることで、共に学ぶ者同士がさまざまな考え方や行動を想起する際に、常識や判断の外側へ行きやすくなり、言葉以外の身ぶり全体を受け止めやすくなることにもつながる。

おわりに

本稿では「記憶の分有」というキーワードをもとに、筆者が在日外国人や多文化共生をテーマにした人権学習講演を創る際に大切にしている点について述べた。実践の背景になっている視点や思想的背景を共有するに留めたが、それぞれの教育現場で奮闘している教職員への気づきや実践への応用につながればと願っている。

最後に、メールをくださった人権学習担当教員の文章を紹介する。これを共有することで学校現場へのエールとしたいた。

「本校でも長年同じような内容で人権学習をやっていたということもあって、人権学習を大切にしよう、などという意識があまりなかったように思います。今年の管理職の先生は、そこを課題に感じられて、是非積極的に人権教育部で取り組んでほしいと年度当初に言われました。そこに、孫先生の講演でした。若い先生方にとっては初めて聞く多様性を尊重するさまざまな例、考え方方が新鮮で興味深かったようです。それは、このような現実があったということにとどまらず、世界の知らないこと、日本のすごい人、そして、子どもの意見から学ぶことなど、今までに感じたことのない発見があったのだと思います。差別はいけない、というあたりまえのことを訴えるのではなく、さまざまな現実を知ることにより、考えさせられる人権学習であったと思います」

付記

本稿は2024年刊行予定の、北山夕華・吉田雄一・川口広美・斎藤仁一朗・川中大輔（編）日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）（監修）『民主的社會をつくるシティズンシップ教育－理論と実践の現在－』（仮）（ナカニシヤ出版）への掲載原稿を一部抜粋、再編集したものである。

参考資料

岡真理（2000）『思考のフロンティア 記憶／物語』（岩波書店）

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA、社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～主催、広瀬浩二郎監修（2023）触の祭典「ユニバーサル・ミュージアム さわる！めぐる物語」https://glow.or.jp/topic/noma_um/

若松英輔（2023）「死者の言葉」認定NPO法人水俣フォーラム「時代に語りかける。「水俣コラム」2023年3月24日No.2」<https://npo.minamata-f.com/>
(URLはすべて2024年2月10日最終閲覧)